

坂田寺跡第2次の調査

昭和49年1月～4月

坂田寺跡第2次発掘調査は、第1次調査区域の南側にあたり、調査面積は570㎡である。

遺跡は、北へ約100mのところを流れる飛鳥川に向って下っていく傾斜地にあり、水田が大きな高低差をもって段々状につづいている。かつて石田茂作氏は、島庄からきた旧村道が坂田村へ通じる道と栢森を通して吉野へ抜ける道とに分岐する三叉路付近を坂田寺北門にあて、これより南に北面する伽藍配置を想定した。（飛鳥時代寺院址の研究）今回は、この三叉路に隣接し、吉野方面へ分れた道をはさんだ北側一枚、南側二枚の水田を調査した。北側の水田の東南隅には通称「マラ石」で知られる柱状石がある。道路をはさんだ南北の調査地は、約2.5mの高低差があり、遺構の状況も異なる。

1. 遺構

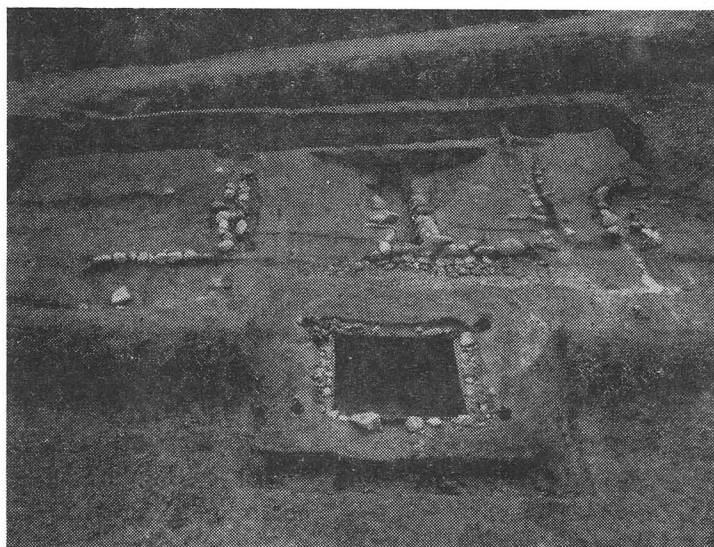
〔北地区〕 検出した遺構は大別して4期に分れる。第Ⅰ期（7C）には、調査区中央を北流する石組の溝SD105がある。SD105は南端を土壌SK104に破壊されている。SD105の西に並行して南北溝SD103があり、他に土壌SK101がある。Ⅰ期の遺構はすべて出土土器から7C代のものであるが、必ずしも同一時期のものではなく、とくにSK101は7C前半に遡るものと思われる。

第Ⅱ期（8C前半）の遺構としては、井戸SE110Aとその南の石敷東西溝SD111Aがある。SE110Aは掘方一辺約4.5mを測るが、井戸本体は破壊されて遺存していない。掘方中には、3本の角材と井戸の側板1枚が重ねられて投入されていた。角材には、木舞穴と思われるものや上端に枘があることからみて、柱材か貫材のような建築部材であろう。また、部分的に残る曲面や仕口穴の痕跡からみて、もと円柱のものを、のちに面取りして角材に転用したも

のとみられる。3本の角材の長さはそれぞれ異なる。最も長いものは3.7 m, 方15cmである。柱材であるとすれば井戸屋形に使用したものを井戸の廃絶とともに捨てたものではなかろうか。第1次調査で検出した石組南北溝SD051が、この井戸SE110 Aの北側にとりつき、井戸の排水施設になっている。石敷溝SD111 Aは、一部分しか残っていないが、井戸回りをめぐる排水施設であった可能性がつよい。

第Ⅲ期(8C後半~10C)は、重複関係からさらに3小期に区分できる。Ⅲ-1期の遺構としてはSD108がある。この溝は、西からきた溝がトレンチ西端で彎曲して向きを変え北流するもので、側壁の一部には凝灰岩切石を使用している。この石は、基壇化粧石を転用したものである。

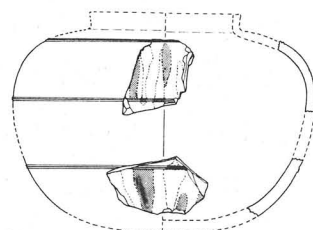
Ⅲ-2期には、Ⅱ期の井戸SE110 Aに重複してSE110 Bを作っている。この井戸の残存状況は極めて良好である。井戸の構造は、まず底に約17×14cmの角材4本を井桁組みにし、その四隅に方17cmの角の隅柱を立てる。隅柱には縦に細い溝を穿ち、この溝に側板を落とし込む仕組みになっている。側板は厚さ6 cm, 巾25cmで底から5段分が遺存していた。隅柱上端は側板5段目上端と一致しているのでこの組み方はここで終るものと思われる。ただし、側板相互の



坂田寺北地区遺構(北から)

連結方法をみると、上下各々2個所の太柄により連絡されており、この太柄の小穴が5段目上端にもみられること、また井戸内に投げ込まれていた3枚の側板のうち1枚の端には、井桁組の仕口を残していること、の2点から井戸SE110 Bは、地上に露出する部分では、

下部5段とは異なって側板を井桁組みにしていたものと思われる。なお、側板裏面には「北一」、「北二」……、などの墨書がありその位置を明示している。また、1枚には「丈部」の大きな線刻書きがあり、おもしろい。



三彩壺（6分の1）

井戸掘方と井戸枠との間には小石、瓦片を詰め込んでいる。掘方四隅には、径23cmの柱痕があり、井戸屋形を伴っていたことが判る。柱痕は、地上に露出する部分を断ち切られ、その上に約50cm大の自然石が1個ずつ置かれていた。もと掘立柱であったのを礎石立柱に変更したものと思われる。

Ⅲ-2期に属する他の遺構としては、この井戸を取り囲むようにして、溝SD106、107、111 Bがあり、また、南北溝SD010がある。

Ⅲ-3期の遺構は、トレンチ中央や、東寄りを南から北へ曲折して流れる石組溝SD115-SD116-SD013がある。

Ⅳ期（11C以降）には、Ⅲ期までの遺構がすべて廃絶した後に、東西につづく石垣SX118を築いており、この北側一帯は細かい瓦片をしきつめた瓦敷となっている。

なお、北地区東南隅にある通称「マラ石」の調査を合わせ行った結果、大正年間まで存続していた旧村道下約50cmで「マラ石」基底部があらわれ、その下から出土した陶器片からみて、現位置に据えられたのは、古くとも明治初年を遡らないことが判明した。

〔南地区〕 検出した遺構は大別して3期に分けられる。最下層の第Ⅰ期（7C）は、部分的なトレンチ調査のためもあるが明らかな遺構の存在は確認していないが、南から北へ急傾斜する遺構面に厚い瓦堆積層が広がっている。おそらく南側に隣接した未調査区域に建築遺構が存在するのであろう。

第Ⅱ期（8C）には、この一帯に大規模な整地土盛をして東西方向につづく段落をつけ、この段落に石垣を築いている。石垣の高さは約2.5mある。この石垣SX120は、トレンチ東端で南へ曲り、SX122となる。SX122のすぐ西側の位置では約12mの間、石垣がとぎれ、北へ傾斜する斜道状の盛り土が認

められる。段上へ続く北からの導入路がとりついていたらしい。この斜道の位置は旧村道の三叉路に一致している。

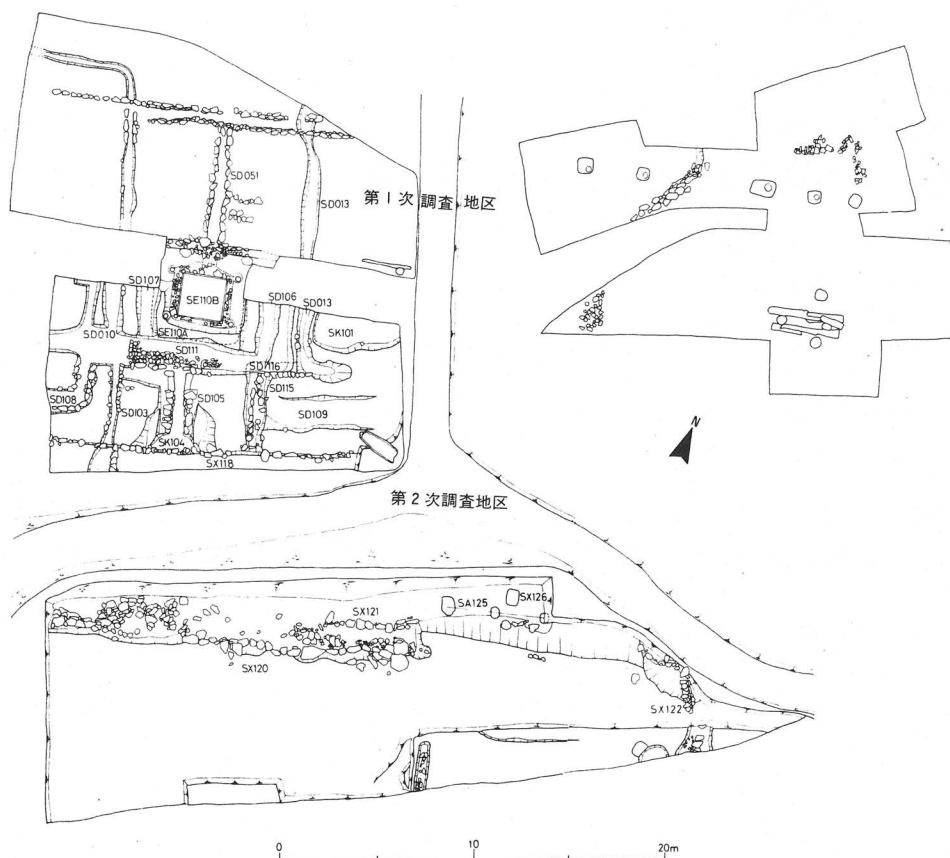
第Ⅲ期（9C以降）は、Ⅱ期の石垣・斜道部分に補修，土盛を行なっている。石垣の補修はSX121にみられる。

以上3期にわたる遺構の他に，柱穴SA125，SX128などがある。これらの遺構はⅢ期の斜道下で検出したため，これより古い時期であることは明らかであるが，石垣との関係も含めてどの時期に属するか不明である。

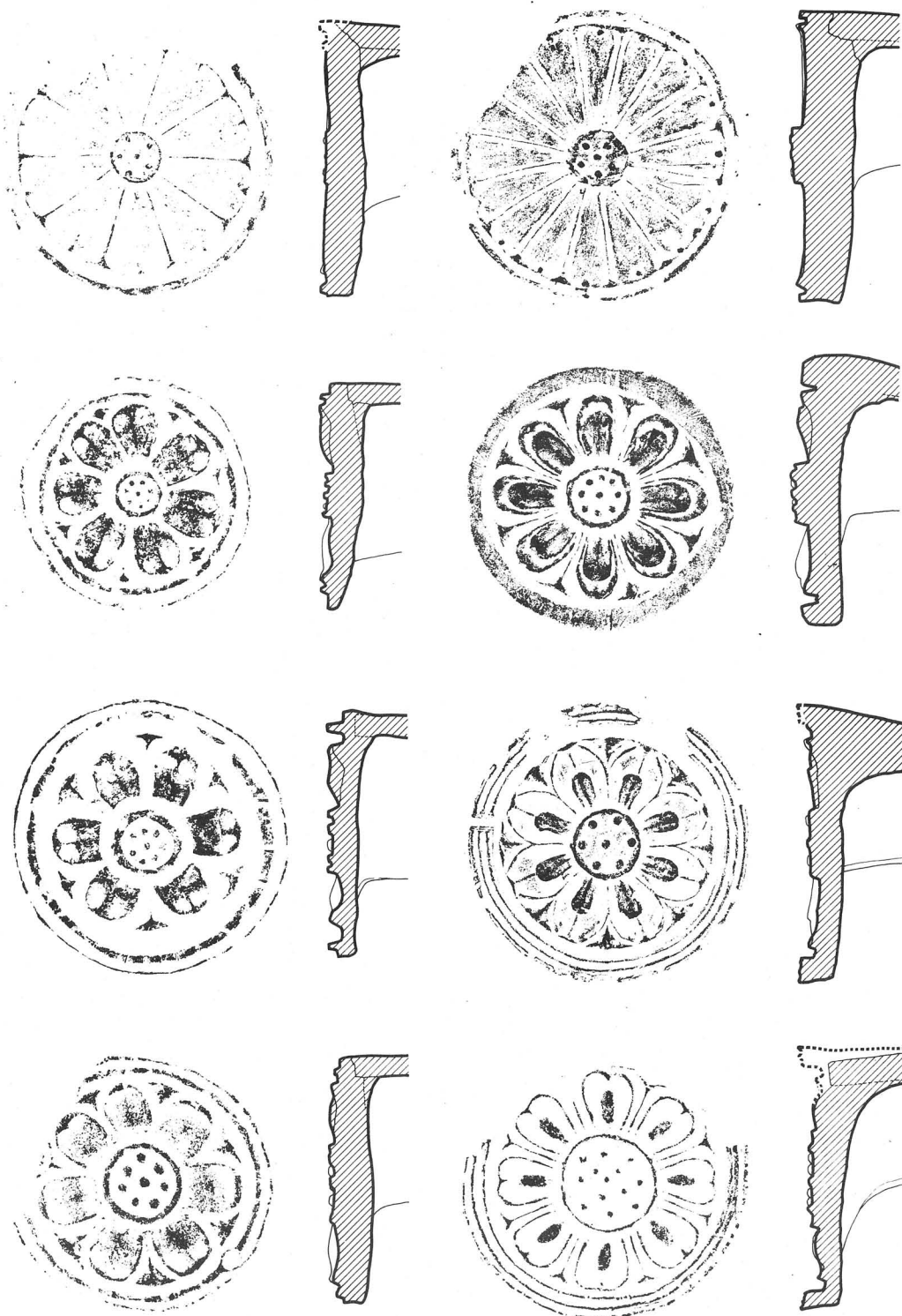
2. 遺物

土器類・瓦類・銅製品・銅銭・鉄製品・木簡がある。

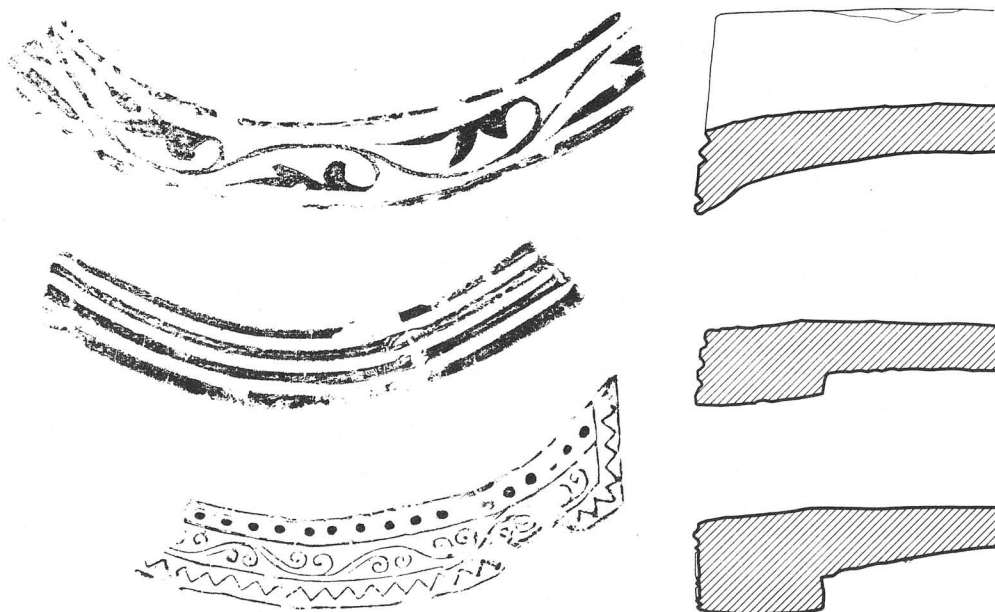
土器類には，土師器，須恵器，黒色土器，緑釉，三彩，灰釉陶器がある。井戸SE110 Bから墨書土器が一括して出土した。そのうち，土師器坏の底部に



坂田寺第2次調査遺構実測図



坂田寺出土軒丸瓦（縮尺4分の1）



坂田寺出土軒平瓦（縮尺4分の1）

書かれた「坂田寺」，「厨」，黒色土器坏の底部に書かれた「南客」が遺構の性格とも関連して興味深い。三彩片には盤と薬壺がある。

瓦類としては大量の丸・平瓦，軒瓦，檼先瓦，鴟尾片がある。

軒丸瓦は13型式ある。大部分が飛鳥～白鳳様式のもので，平安時代のものが1型式ある。

軒平瓦は6型式で量も少ない。南地区下層からは手彫り忍冬唐草文の良好な資料を得た。なお，井戸SE110 Bからは「神功開宝」2枚と木簡が出土している。木簡は材木を数えた帳簿風のものの断片である。

今回調査した区域は，建築遺構としてはまとまったものを検出することはできなかったが，北地区における井戸の存在と縦横にめぐる排水施設，大量の瓦類や墨書土器の出土などからみて寺域内の「厨」等の附属施設に関連する場所であった可能性が高い。また，南地区の場合は，大規模な整地をして平垣面を築いているなど，伽藍の中枢部により近いと思われるが，創建当初の実態をはじめ，具体的な解釈はすべて今後の調査に残されている。